

いは光化門十字路口からソウル駅→龍山を結ぶ路線には植民地時代の足跡がたくさんある所だ。南山の南麓は終戦後に海外から帰って来た貧しい人々のバラック村、いわゆる「解放村」が目につく。ここから漢江を渡ると「牛眠山」までは1970年以降新しく開発された高層アパートや現代的なビルが並ぶ。すなわち、北岳山から南の牛眠山まではソウル608年の歴史を物語る「ソウルの景観断面」と言えるであろう。

【コメント】

松田 利彦

邢基柱氏の発表は、朝鮮王朝初期から日本の植民地支配の末期までという600年余りにわたる長いスパンを対象として、朝鮮建国の際における「都造り」、近代移行期における近代化の努力、日本の植民地統治の影響などについて論じたものである。コメンテーターとしては、まずそのスケールの大きさに感銘を受けたと申し上げておきたい。そして、この報告の対象とした各時代が、ソウルに地層のように都市景観を刻み込み、それが今日なお「景観断面」として観察できるという結語を興味深く聞いた。

以下、朝鮮近代史研究者の立場から、二点のみ若干の批評を試みたい。

第一点は、開港期の評価と植民地期との連続性・断絶性の問題である。報告においては、高宗期の都市計画を、「日本軍国主義の侵略によって結局は失敗したが、初めての近代的「都市造り」という点で重要な歴史的意味がある」と評価している。報告者も触れているように、高宗皇帝は「光武改革」と呼ばれる改革を推進したが、そもそも一般にこの改革は王権権力の強化を目指した多分に反動的な性格も帯びていたとされるものである。かかる光武改革の一環としての都市計画を「近代化」とのみ規定してよいのだろうか。また、同時期の都市計画がパリや東京の都市計画に類似している、あるいは植民地初期の都市整備が朝鮮王朝期の道路の延長・直線化にあった、という報告者自身の指摘を考慮するならば、開港期と植民地期には一定の連続性も存在していたのではないかという疑問が残る。

第二点は、植民地期ソウルにおける民族的な住み分けについての評価である。ソウル南部地域に日本人居住地域が広がったことは先行諸研究でも指摘されている重要な論点であるが、「ソウルは完全に日本人のソウル、日本人の舞台に代わっていた」という評価にはいささか保留が必要だろう。報告者が提示している図によっても確認できるように、鐘路以北は植民地末期においても依然として朝鮮人多住地域であった。さらに、並木真人氏が明らかにしたように、植民地期後半には、日本人多住地域にも朝鮮人の居住が拡散し、混住現象が進行した。その結果、植民地末期には、朝鮮人の居住人口が10%未満の町洞はほとんどなくなったのである。植民地支配によって朝鮮人が自らの国の首都から駆逐されつつあったという事実の重要性は全面的に認めつつも、その一方で、朝鮮民族の「したたかさ」を窺わせるような現象も視野に入れることで、ソウルの歴史の変容をより豊かに把握しうる可能性もあるのではないかという印象を抱いた。

(国際日本文化研究センター)